

遠距離介護者は何をしてるのか

—提案の判断と離れて暮らす家族の知識—

中 川 敦

はじめに

1. 問題設定
2. 研究の対象と方法
3. 分析
 - (1) 強い提案を弱くする遠距離介護者のふるまい
 - (2) 家族についての知識の欠如と気にかけるということ
 - (3) 父親をより良く知る人間であることの競合
4. 結論

はじめに

1986年に全米退職者協会は、『遠く離れてそれでも介護する—遠距離介護者のためのガイド』という無料のリーフレットを出版した。「遠距離介護」をタイトルに含む刊行物としては最初期のこのリーフレットには、遠距離介護者のためのものであるにもかかわらず、「あなた個人では、遠くから、あなたの親族が必要としている介護を提供することはできない」(American Association of Retired Persons 1986: 16) という興味深い記述が存在する。つまり遠距離介護 (=long-distance care) であるにもかかわらず、介護ができないというのである。遠距離介護に関するこうした言及は珍しいものではなく、日本でも、遠距離介護について語られる中で「離れて暮らす家族が介護するのは現実的に難しい」(Home Care MEDICINE編集部 2002: 48) と述べられたり、「遠距離では実質的に手を出すことができません」(松本ほか 2003: 22) と言われたりすることがある。

しかしこのような言い方がなされる一方で、遠く離れて暮らす高齢の家族のために、頻繁な通いを行う事例が、遠距離介護としてこれまで数多く報告されてきた。新聞紙上におけるlong-distance careという言葉の利用として最初期のものである、1983年12月29日のニューヨークタイムズの記事では、ニューヨーク州のマンハッタンから約650km離れた¹⁾、オハイオ州のクリーブランドまで定期的な訪問を繰り返す男性の事例が紹介されている(Collins 1983)。同様に、日本で遠距離介護という言葉の利用として最初期の雑誌記事の中でも、東京都杉並区から山梨県甲府市までの帰省を繰り返す女性の事例が紹介されている(山脇 1994)。

介護ができないと言われるにもかかわらず、遠距離介護者はこのように遠く離れた高齢の家族のもとへ頻繁な通いを繰り返すとされる。では彼ら／彼女らは頻繁な通いを行う先で

何をしているのだろうか。これまでの遠距離介護の社会学的研究が、主に、「なぜ遠距離介護をするのか」といった、遠距離介護の動機をめぐるwhyの問いの上に沿って行われてきた中で（中川 2006；2012）、「遠距離介護者は何をしているのか」というwhatをめぐる問いに向き合ってみることも、遠距離介護という現象を解明する上で重要な作業であると考えられる。

1. 問題設定

「遠距離介護者は何をしているのか」という問いに対する答えの手がかりを既述のリーフレットから見いだせる。リーフレットの引用箇所の直後は以下の通りである。

遠距離介護者として、あなたは自分自身に正直にならないといけません。自分が直面している負担を認識しましょう。そして、サポート源を見定め、コーディネートし、監視する中で、ベストを尽くしている自分を褒めてあげましょう。（American Association of Retired Persons 1986：16、下線は引用者）

つまり遠距離介護者は「サポート源を見定め、コーディネートし、監視する」のであるという。このような認識を裏付けるように、ブックレットではサポート源となる団体や事業所などが数多く紹介されている（American Association of Retired Persons 1986）。日本の遠距離介護者向けの書籍でも、同様に遠距離介護者が高齢の家族のために利用可能なサービスの紹介が多くなされている（cf. 太田 2000）。このことは、遠距離介護にとってその内実は高齢の家族への直接的な支援だけではなく、高齢の家族のそばにある地域の福祉サービスのコーディネート、そしてそのための福祉の支援者とのコミュニケーションを行うことであることを推察させる。

では、遠距離介護のこうした側面を把握する上で、老親・成人子関係に注目した先行研究は、これまでどのような知見を獲得してきたのだろうか（cf. 中川 2006：42）。まず日本の親子関係の日常接触のパターンに関して、「同居子との濃密接触、別居子との疎遠な交渉」（湯沢 1972：46）という命題が指摘された。その後、親子の空間的距離などを詳細に把握した上で、別居子によって高齢の親に対して行われる訪問や援助の実際を明らかにしようとするソーシャルサポート研究の中で、別居親子間の距離が増大すると、直接的なサポートが減少するという知見が明らかにされる（岡村 1984；横山ほか 1994；田原・荒井 1999）。そしてこうした知見を踏まえて遠居の子供たちの老親介護機能の低さが主張されていたのである（森岡 1993；藤崎 1998）。この主張は介護ができないという遠距離介護の特徴を一面で捉えており、親子間の直接的な支援関係に限定されない側面に注目する必要性を示唆するものである。実際かつて藤崎は、高齢者と福祉の官僚組織をつなぐ家族・親族の「媒介的機能」（藤崎 1982：74）の重要性を指摘していた。介護保険導入以降、高齢者と福祉の「媒介的機能」といった役割を家族に期待する傾向は高まっていると考えられ、遠距離介護という文脈でも、こうした側面に光を当てることは一定の価値があると考えられる。

その際、遠距離介護者と福祉の支援者のコミュニケーションそれ自体にアプローチすることが重要である。これまでの家族による介護に関するいくつかの研究も、家族介護のプロセスは、介護者のみで完結するものではなく、複数の当事者との交渉の結果として行わ

れることを強調してきた。たとえばフィンチとメイソンは、複数の親族へのインタビュー調査によって介護に関する家族責任が交渉の過程を通じて達成されるものであることを指摘しており (Finch & Mason 1993)、グブリアムは介護をめぐる多面的な現実の構成を複数の当事者の語り注目する中で明らかにしている (Gubrium 1990)。その一方でそうした現実を、回顧的なインタビュー調査ではなく、「いま、ここ」で行われている、家族介護に関する複数の当事者間のコミュニケーションそれ自体から捉えようとする研究は非常に少ない。そうした課題は、当然に遠距離介護の研究にも課せられるものである。

そこで本稿では、「遠距離介護者は何をしてるのか」、という問いに答えるために、遠距離介護者と、高齢で介護が必要な離れて暮らす家族の住む地域の福祉の支援者とのコミュニケーションの実際を明らかにしていく。

2. 研究の対象と方法

本稿で分析されるデータは、2012年7月に島根県A市の地域包括支援センターが「総合相談支援事業」の一環として主催し、離れて暮らす家族および高齢の家族が住む地域の福祉の支援者が参加して行われた²⁾、いわゆるケア会議³⁾、約1時間40分の撮影データの一部である⁴⁾。ケア会議の内容は、長男の姉で島根県に住む知的障害者である63歳の花子 (以下、分析データに関する固有名は全て仮名) と、一緒に暮らしている80代の両親 (母親に認知症あり) への支援の問題について議論がなされている。ケア会議の出席者は、広島に住む花子の弟で長男である茂太、そして茂太の妻で、夫の両親と花子のために月1回程度の帰省を繰返している遠距離介護者の夏美、そして高齢の家族の住む地域の福祉の支援者である山田、近松、高橋、川上⁵⁾、および筆者の7名である。

なおこのケア会議開催の経緯は、川上によると、きっかけは花子の支援を担当している山田より、地域包括支援センターの川上への相談であった。山田による相談は、花子のための訪問看護 (服薬確認) とヘルパーによるサービス提供 (身体介護: 着替え・身支度・トイレ介助) は実現しているが、介護保険からの母親へのサービス提供がうまくいっていないため、「このお宅への支援にはなっていない」との趣旨であった。そこで川上が相談支援を考え、調整・準備を行い、このケア会議が開催された、とのことである。

このケア会議を分析するにあたって本稿では、ハーヴェー・サックスらによって生み出された会話分析を参考にしながら (Sacks et al. 1974)、発話のみならず、視線や体の向きなども踏まえた分析を行う。会話分析では、「参加者の志向に根ざした記述」 (Schegloff 1988: 21) を目指し、参加者の相互行為の中で、ある発話やふるまいが、なぜ、その時に、そうした形で産出されたのかについて、参加者の相互行為を組み立てている社会的な手続きのあり方との結びつき (Schegloff 1991)、という観点から分析していく。

3. 分析

(1) 強い提案を弱くする遠距離介護者のふるまい

以下にトランスクリプト⁶⁾を記載した断片1は、高橋 (精神科所属の精神保健福祉士) によって行われた提案をめぐるやりとりである。

断片1が始まるまでに行われている会話は以下のようなものであった。現在両親と同居をしている63歳の娘である知的障害者の花子が利用しているサービス区分が、65歳になる

と障害者から高齢者に変更になる。この時、障害のサービス区分であれば比較的容易な施設入所が、高齢者のサービス区分になると困難になってしまう。そこで、区分変更が行われる前の段階で、花子の施設入所に向かって動く必要があるが、花子の施設入所を両親は受け入れない可能性が高い。こうした議論の中で高橋は、所属している事業所の精神科医の見解として、3人は一緒にいるべきであり、誰か一人が施設入所という形を取るべきではないという意見を、断片1の直前で述べている。

断片1【高専賃がいいんじゃないか】(52:06~52:35)⁷⁾

- 01 高橋： [でま:僕もいろいろ考えた中で:]=
 [((高橋は姿勢を起こし体を近松に))]
- 02 高橋： =[.hhもろく↑じゅうごを越えたら僕はですね:(0.8) 高専賃が=]
 [((高橋の視線05行目まで近松へ))]
- 03 高橋： =いいんじゃないかと思ってるん° ですよ° .]=
- 04 近松： =あ::3人[で.
- 05 高橋： [3人[で.
- 06 近松： [°う[::ん°
 [((高橋の視線は夏美。夏美は高橋を見ながら顔を突き出す))]
- 07 高橋： 逆に言↑えば:3人でみんなで:::(0.2)そう[い]う(.)
 08 茂太： [°うん°]
- 09 高橋： 高齢者専用の:(0.2)>住宅とかに-(0.3)
- 10 近松： °う[ん°
- 11 高橋： [みんなで[入って:(0.2)過ごすという=]
 [((高橋の視線は夏美へ))]
- 12 高橋： =の[も:,
- 13 夏美： [(h)(h)[(h)(h)
 [((夏美は顔を下に向ける))]
- 14 高橋： [ま一つの[方法としては]=
 [((高橋の視線川上へ))]
- 15 高橋： =[あるのかな:[という].
 [((高橋の視線は夏美へ))]
- 16 近松： [う:::] :ん
- 17 (0.4)
- 18 高橋： あの::や-それなりのやっぱ介護のu見守りもあるし:.
 19 .hhそういった形も::ま:(1.2)選択肢としては
 20 [あってもいいのかな::↑というのは=
 [((高橋の視線は川上へ))]
- 21 高橋： =ちょっと思ったりも[したんですね:
 [((高橋の視線は夏美へ))]

まず高橋は、01-03行目までで、高専賃（高齢者専用賃貸住宅）へ入居するのが良いという提案を行っている。この提案は、01行目で「いろいろ考えた中で、」と述べられていること、この発話に合わせて姿勢を起こしていることなどから、それは有力な提案として差し出されていることが分かる。この提案に対して、提案が差し向けられている市の障がい福祉課の職員である近松は、04行目ですぐに「あ：3人[で]と理解候補の提示を行っている。それは、その提案が、3人一緒での高専賃の入居であることが高橋によって暗示されていたという理解の候補を提示するという意味で、元来非提携的（disaffiliative）である修復の開始でありながらも、高橋にこの理解の候補の提示を与えるという、限りなく提携的な（affiliative）ものとなっている（Hayashi & Hayano 2013）。これに対して05行目で高橋は、近松と同じ発話を強勢を置いて繰り返すことで承認を与えている（cf. Schegloff 1996）。

以上のやりとりの直後で夏美が顔を前に突き出して、高橋の提案の趣旨がうまく理解できていない仕草を見せる。すると高橋は、近松とのやりとりで用いられていた「高専賃」（02行目）という用語を「高齢者専用の」「住宅」（09行目）と理解しやすい形に変え、また「3人[で.]」（05行目）の意味するところも、「3人でみんなで」（07行目）「みんなで[入って:]」「過ごす」（11行目）ことと、より丁寧になら提案を改めて行う。これは、夏美が専門家でないためにその提案の詳細が理解できなかったが、その詳細を理解する必要のある提案の可否を判断する主体であることへの高橋の志向を示すものである。そして高橋は11行目の発話と同時に視線も夏美に向けることで、その提案を夏美に対して差し出しているのである。

ところが、夏美はその提案に対して、13行目で笑いだして下を向いてしまう。ここにおいて、この提案が受け入れられる見込みの薄いものであることが示唆されている。こうした夏美の反応を踏まえて、高橋は「あ：や-それなりのやっぱ介護のu見守りもあるし：」（18行目）と、その提案を行う理由を提示することで、その妥当性を主張しつつも、「ま一つの[方法としては] [あるのかな：[という].」（14, 15行目）、「.h.h.そういった形も：：ま：（1.2）選択肢としては[あってもいいのかな：：というのはちょっと思ったりも[したんですね：」（19-21行目）と、その提案が複数の選択の中の1つであり、また個人的な些細な意見に過ぎないという形で、提案を弱める形で発話をデザインしている。

ここで参考になるのが、不妊治療の診療場面における意思決定の過程に関する川島による研究である（川島 2008）。川島は、医師が患者に対して行う提案の分析を通じて、「医師が患者の反応に沿って提案の構造や説明の言い表し方を臨機応変に変えていること」（川島 2008：168）を明らかにしている。

断片1の分析から言えることは、遠距離介護者が参加するケア会議の場面においても、川島の研究の知見と同様に、福祉の支援者は遠距離介護者に対して提案を行う際に、専門用語をわかりやく言い換えたり、その意図について詳しい説明を行うことで、遠距離介護者が専門家ではないことに志向しつつも、提案の可否に参与すべき意思決定の重要な主体であることを示しているということである。一方で、そのようにして遠距離介護者に対して差し出された提案に対して、遠距離介護者は些細にも思える笑いや視線によって、福祉の支援者が強く差し出していた提案を、非常に弱い形へと変化させることがあった⁸⁾。つまり遠距離介護者が行っている重要な仕事は、このような形で福祉の支援者とのコミュニケーションの中で提案をめぐるやりとりに参与することで、介護に関する意思決定を行っていくことにあ

ると考えられる⁹⁾。

(2) 家族についての知識の欠如と気にかけるということ

先の断片1の分析からは、遠距離介護者が福祉の支援者とのコミュニケーションの中で、提案をめぐって福祉の支援者から意思決定の重要な主体として扱われており、また遠距離介護者自身もそのようにふるまっていることが明らかになっていた。このことは遠距離介護者が福祉の支援者と高齢の家族をつなぐ「媒介的機能」を果たしている好例と言えるだろう。

しかしそもそも、家族が福祉の支援者との「媒介的機能」を果たす根拠の1つは、家族が高齢者の「生活環境に密着して」（藤崎 1982：74）いるからだとされていた。では家族が生活環境に密着しているわけではないことがコミュニケーションの中で表面化した場合、遠距離介護者にとって、福祉の専門職者で行う介護の意思決定過程はどのようなものになるのだろうか。その際、遠距離介護者は何をしているのだろうか。

以下では、遠距離介護者が、離れて暮らす家族の生活環境に密着しているわけではないがために生じる問題の一例として、離れて暮らす家族についての知識の欠如が明らかになっている場面を取り上げ、こうした課題を検討する。具体的には、以下の断片2は、それまで知らなかった家族の行為が明らかになった場面であり、断片3は、その家族の行為への対処として支援に関する提案が行われている場面である。

なお断片2に至るまでの会話は、以下の通りである。将来何かあったときのために、長男（花子の弟）である茂太が、両親には告げずに、花子の施設入所の待機の申請をすることが決められる。その直後、近松が、父親がいま住んでいる家にこだわりを持っているかについての質問、つまり高齢者専用賃貸住宅に移り住むことに父親が納得する可能性があるかという趣旨の質問をする。しかし父親は家に強いこだわりを持っており、また元気であるため、現時点で高齢者専用賃貸住宅に移り住むことについて、父親を納得させるのは難しいということが確認される。断片2はその直後の会話である。

断片2 【最近自転車乗ってるんです?】（1：09：47～1：10：24）¹⁰⁾

- 01 (7.0)
 ((この間、近松は手元の書類を音をたててめくり、両面を見返す。))
- 02 近松： [いまはd >だから<花子さんの身体介護なので:,=
 [((山田の視線は15行目まで概ね近松))
- 03 近松： =[>やっぱり<家事のところは はいってないん[ですよね:]=
 [((近松の顔の向きは15行目まで山田))
- 04 山田： [はい(れ)ない]
- 05 近松： =::: .hh[hhだ-
- 06 山田： [あのお父さんが台所を触らせない(.)° んで[す.°
- 07 近松： [う::ん
- 08 相変わらずなん[です] よね.:
- 09 山田： [はい]
- 10 山田： なので:<わたしたちがいくら>(.) .hたとえば:(.)ね?

- 11 近松： う：：[ん
 12 山田： [あの：：(.)「お手伝いしましょうか」とか： (.) .hhなんかk
 13 あの：： (0.2)ね(.)あの：お総菜買ってくるのも：お父さん
 14 自転車で行かれとるわけですよ . [<トットテムまで.>]
 15 近松： [う：：：：：ん]
 16 (0.2)
 17 近松： [う：ん-
 18 夏美： [えっ (1.8)>最近自転車乗ってるんで[す？<
 [((夏美は急に山田に顔を向ける))]
 19 山田： [はい
 20 (1.2)
 21 川上： は[hh：：
 22 近松： [ヤマシタじゃなくて あの[トッ° テム° .]
 23 高橋： [きのうも，] [きのうも]
 24 川上： [トットテムなんだhh]
 25 高橋： =な[んかね] 市役所まで自転車で来たって>° つってったかな° <
 26 山田： [トッテ-]
 27 山田： <トッ[テム] まで自転車で.>
 28 高橋： [° きのうも° <

まず近松は03行目で、山田に向けて「>やっぱり<家事のところははいってないん[ですよね:]」と述べることで、両親及び花子の世帯が、家事サービスを導入していないことの確認要求を行っている。これに対して、04行目で山田は「はい(れ)ない」と述べることで、確認を行った上で、06行目で家事サービスが導入できない理由として、父親が台所を触らせないという行動を報告する。07, 08行目で近松は、山田が報告した父親の具体的な行動に対して、父親の一般的な困った傾向であるという評価を行い、この評価に09行目で山田は同意を行っている。そして、10, 12-14行目で山田は、父親が単に家事サービスの利用を拒否するだけではなく、自転車に乗り、遠いスーパーまで行くという苦勞をしてでも、人の手を借りずに自分で家事を担おうとしているという、頑固さの程度がより高いことを示す父親の行動を、「(.) .hhなんかkあの：： (0.2) ね (.)あの：」(12, 13行目) と言いよどむことで、言いにくいこととして報告している。この発話が終わった直後の18行目で、「えっ」という夏美の強調された感嘆詞が、山田に顔を向ける動きともに置かれ、1.8秒の沈黙を経て、夏美は「>最近自転車乗ってるんで[す？<」という質問を行っている。

そして注目に値するのが、12-14行目で山田が行った父親の行動についての報告と、18行目で夏美が行う質問である、「>最近自転車乗ってるんで[す？<」の発話の組立てに差異があることだ。まず18行目の「>最近自転車乗ってるんで[す？<」という夏美の発話には、山田の報告にはなかった「最近」と、期間を限定する表現が用いられている。それは、夏美が「最近」以外のことは知っているという主張として理解できる。ではそのような形で、本来は夏美が知っている事柄とは何か？

ここで夏美の18行目の発話で、「自転車」という言葉が繰返されながらも続く動詞が、山

田が用いた「行かれとる」（14行目）から「乗ってる」（18行目）に変化していることが重要である。そこでは、新たに夏美が知ったことは、山田の報告を契機としながらも、山田が当初提示していたスーパーに総菜を買いに行ってしまうほど、家事サービスの導入を拒むという父親の頑固さではなく、父親が自転車に乗っているという行為そのものが伴うリスクの存在が主張されているのである、この結果、そこではトピックの転換が行われているのである。

だとすれば、18行目の夏美の「えっ」という発話は、山田が当初提示していたスーパーに自転車で総菜を買いに行ってしまうほど、家事サービスの導入を拒むという父親の頑固さ、という問題から、父親が自転車に乗っているという行為そのものについての問題へと、話題の移行を円滑に行うための手続きとして利用されていると言えよう¹¹⁾。さらに踏み込んで言えば、夏美のここでの驚きは、自身が父親を深く気にかけるべき人間であることを示すふるまいであるとも考えられる。

以上のように、遠距離介護者にとって、離れて暮らす家族の生活に密着しているわけではないために生じる、高齢の家族についての知識の欠如という問題は、遠距離介護者が離れて暮らす家族を気にかけて、また気かけられた家族の行為を焦点化する形へとトピックを転換するという遠距離介護者のふるまいを伴うものであったのである。

（3）父親をより良く知る人間であることの競合

断片3は、断片2で焦点化された父親の行為への対応として、支援の提案がなされている。

なお断片3は、断片2の1分20秒後の会話であり、この間以下のようなやりとりが行われている。すなわち、トットテムの場所が両親の住む家から長い坂を下ったことにあることが確認される。そして山田が夏美に、父親が自転車に乗っていることが心配であるという発言をし、夏美が強い同意を行う。山田と夏美がそうしたやりとりをしている一方、川上は近松に、トットテムが買い物の宅配を行っていることの確認要求をすると、近松ではなく高橋がそれに対する確認を行う。以下はその直後の会話である。

断片3【買い物支援はダメ】（1：12：26～1：13：00）

- 01 川上： [ト-トットテム:注[文すると持ってきてくれるじゃない[ですか:.
 [(12行目の途中まで川上の顔の向きは山田))
- 02 茂太： [そういうときこそタクシー使えば° いい°
- 03 山田： [う:::~::~:
- 04 :[:ん
- 05 川上： [そ-それ[でもダメなのか° な°]
- 06 山田： [>たぶん<そういう] (.)う:::ん,>だっか自分で選び
- 07 たいん[ですよ.<]
- 08 川上： [t t]t トッテ[ムの物でも?
- 09 (): [()
- 10 山田： uそ:::そ[::そ:::
- 11 川上： [.hhあ:::(h):(h):(h):

- 12 そうなんだ[:.hhhhss.h[h
 [(23行目まで川上の顔の向きは夏美))
- 13 夏美： [あ:[ん [買い物支援はダメだと思います.
 [(夏美は右手を否定するように振る))
- 14 川上： は::[::]
- 15 山田： [自分で-]
- 16 夏美： [は:い.た]く配でしょう？
- 17 川上： うんうん,その[トットテム(.)さん(.)][が::]
- 18 山田： [自b-
- 19 夏美： [がね]
- 20 (.)
- 21 夏美： u[え::]
- 22 川上： [持つ]てきてくれるって言ってもダメなん
 23 °ですよ[ね° .
- 24 山田： [<自分がこの物を見て選びたい> (1.0)
 [(30行目まで山田の視線はおおむね川上、時々近松にも向け
 られる))
- 25 ()： (° うん°)
- 26 山田： という思いが<強いので::>.hh難しい.=私もその声かけはさして
 27 いただいたんですけども:[: ,
- 28(川上)： [° う:::[ん°
- 29 山田： [も「自分で選びたいけ:
 30 いいわ]° と° .
- 31 (0.2)
- 32(川上)： (° うん°)
- 33 山田： うん(.)言って:こと- (0.2) 断りをされまし° た° (.)うん

断片2で家族によって気かけられていた父親の自転車に乗るというリスクを伴う行為は、断片3において対応すべき問題として扱われている。茂太は02行目で、「[そういうときこそタクシー使えば° いい° 」と、父親に向けて将来行われるかもしれない提案を提示している。しかしこの茂太による提案に先立って川上は、01行目で、「トットテム:注[文すると持ってきてくれるじゃない[ですか::]」と、リスクを解消するための提案の前提となりうる情報の提供をした上で、その提案に父親が応答する見込みがあるかどうかについて、05行目で「それでもダメなのかな?」と、同意による回答が棄却となるような、受け入れられる見込みの薄いことを前提とした提案を行っている。ここで注目されるのは、この提案が、01行目の発話に伴う川上の顔の向きから、夏美ではなく山田に向けられているということである。すなわち、その提案に対して父親がどのような応答をするかを知っている人間は、まずは、自転車に乗っているというリスクを伴う行動について知らなかった、離れて暮らす家族の夏美ではなく、その行動についての報告を行った、そばにいる福祉の支援者の山田であるという、川上の理解が示されているのである。

ところが13行目以降を見ていくと、こうした位置づけが変化していくことが分かる。13行目の「買い物支援はダメだと思います。」という発話において、夏美は01, 05行目の川上の提案に明確に答えるような形式で、父親が提案を受け入れないであろうことを主張している。すなわち夏美はここで、当初川上が山田に向けていた提案に対する父親の応答を汲み取れる人間としての立場が、自己にもあてはまるという主張を開始しているのである。これに対して、14行目で川上は「は::[::]と、夏美が述べる父親が提案を拒否するという可能性について理解を示しながらも、話しを促すような形で、聞き手であることを行っている。すると夏美は、16行目で「たく配でしょう？」と、13行目の「買い物支援」という言葉を「宅配」と言い換えながら、川上が父親が拒否するか否かを尋ねていた提案の内容の確認要求をする¹²⁾。

ここで重要なことは、15行目で、山田が「自分で-」と06, 07行目で述べられた父親が提案を拒否する理由を、再度、呈示しようとしているにもかかわらず、夏美の確認要求がそれを遮る形で行われていることである。類似することが、18行目でも生じており、17行目の前半で「うんうん、」と、夏美の確認要求に対する川上の確認が終了したところで、山田が再び、父親が提案を拒否する理由を述べようとする発話を開始する。しかし、それと同時に川上は、夏美に向けて、「その[トッテム(.)さん(.)][が:] [持つ]てきてくれるって言ってもダメなん° ですよ[ね° .]」（17, 22, 23行目）と、父親が提案を拒否することについての確認要求を行い、山田の発話は途中で放棄されている。ここで2回にわたって山田の発話が途中で放棄されているのは、夏美と川上が互いに、父親のそばにいる福祉の支援者の山田よりも、離れていても家族である夏美こそが、提案に対して父親がどのような態度をとるかを知るべき人間であると位置づけているからだと言える。しかしその一方で、24, 26, 27, 29, 30, 33行目で山田はそれまで2回にわたって放棄された、父親が買い物支援を拒む理由の提示の完遂を行っている。その際、興味深いことは、山田が29, 30行目で「自分で選びたいけ:いいわ」と実際の父親の拒絶を引用し、事実として父親の態度を知っているという報告を行っていることである。これは川上が提示した提案に類する支援を、山田は父親に対してすでに行っていることの訴えでもあるが、同時に、13行目において夏美は「買い物支援はダメだと思います。」と親の態度の推量に過ぎなかったことと比較すると、それは、山田がそばにいる福祉の支援者として、夏美が父親のことをより良く知っている人間であることの再度の主張であるとも言える¹³⁾。

以上の分析からは、遠距離介護者は、自身が知らなかった離れて暮らす家族の行為の問題に対しても、そばにいる福祉の支援者に割り当てられていた、父親をより良く知る人間としての位置づけを、取り戻すような形で主張を行うことで、問題となっている行為への支援に関する意思決定の過程に参加していたのだと言える。他方でそばにいる福祉の支援者もまた、再度、父親をより良く知る人間としての位置づけを主張することがあるなど、支援の方向性では一致を見せていたとしても、その「知識の上下関係」(Raymond & Heritage 2006; 戸江 2012: 539)においては、遠距離介護者とそばにいる福祉の支援者の間での競合が生じる場合があることが確認された。

4. 結論

以下、分析を通じて得られた知見をまとめながら結論を述べたい。「遠距離介護者は何を

してるのか」という問いに対する本稿が提示する1つの解は、遠距離介護者は福祉の支援者とのコミュニケーションを通じて、離れて暮らす高齢の家族の介護に関する意思決定過程に参加しているのであり、それは特に提案をめぐるやりとりにおいて遂行されるということである。ただし、遠距離介護者がそうした形で、福祉の支援者による提案の可否を判断する強い主体であることも、福祉の支援者が遠距離介護者のために提案をわかりやすい形で言い直すなど、コミュニケーションの中で共同的に位置づけられた結果であった。

また離れて暮らす家族の生活環境に密着していないがために、遠距離介護者の知識の欠如の問題が生起しているコミュニケーションにおいては、遠距離介護者は知らなかった家族の行為を、トピックの転換を行う形で焦点化し、家族を気にかけるといったふるまいをしていることも明らかになった。一方、遠距離介護者が知らなかった家族の行為に対する支援の提案に関して、福祉の支援者と遠距離介護者の間で方向性は一致しながらも、判断の根拠となる、どちらが離れて暮らす家族のことをより良く知る人間かの位置づけ、すなわち家族に関する「知識の上下関係」において、競合が生じうることも確認された。

本稿が分析した断片では、その問題に対応する支援の提案の可否に関する判断は同一であったが、家族とは離れて暮らしている遠距離介護者と、家族のそばにいる福祉の支援者の間での知識の問題をめぐる競合が、支援の方向性の不一致と結びついた形で生じている場合もあるだろう。その際に、その意思決定を判断する正当性がいかなる形で導き出されるのかを検討することが、今後の課題と考えられる¹⁴⁾。

注

- 1) 東京駅から広島駅までは直線距離で約680km。
- 2) 本稿が対象とするデータでは、要介護の高齢者自身は出席していない。近年の福祉／家族の社会学では、家族介護の経験を介護する側のみから理解することへの限界が強く指摘されている（上野 2011）。その1つの理由は、高齢者の介護や扶養に関しては、家族成員同士の利害が衝突する可能性が高いため、家族成員間の認識の相違が生み出されやすいからである（cf. 田淵 1999）。今後は、遠距離介護者と福祉の支援者に加えて、要介護の高齢者も参加して行われているコミュニケーションの分析を行うことが課題となるだろう。
- 3) なお同センターへの聞き取りによると、センター主催、あるいはセンターが参加するケア会議は、月に3～4回程度行われている。
- 4) 撮影の対象となったケア会議のすべての参加者に対しては、研究の説明を行った上で、データ利用についての承諾書への署名を得た。
- 5) 4名の福祉の支援者の詳細について述べると、山田は花子のプランをたてている相談支援専門員／精神保健福祉士でこのケア会議では司会を務めている。近松は市役所の高齢障がい課に勤めている行政職員で、花子のサービス利用に伴う事務手続きを担当している。高橋は花子と母親が通い、かつその事業所の訪問看護を利用している精神科所属の精神保健福祉士である。川上は地域包括支援センターの主任介護支援専門員、いわゆる主任ケアマネで、このケア会議の開催を呼びかけた。
- 6) トランスクリプト記号のルールは原則として（串田 2006：vii-ix）に従った。具体的には以下の通り。
[オーヴァーラップの開始位置。
] オーヴァーラップの終了位置。

- = 末尾に等号を付した発話と冒頭に等号を付した発話のあいだに、感知可能な間隙が全くないことを示す。（本来なら同じ行に続けて書くべきひとりの発話が、紙幅の制約上、分断されて記載されている場合にも、この記号を用いる）。
- (数字) 丸括弧内の数値は、その位置にその秒数の間隙があることを示す。
- (.) 丸括弧内のドットは、その位置にごくわずかの感知可能な間隙があることを示す。
- :
- 発話中のコロンは、直前の音が引き延ばされていることを示す。コロンの数は、引き延ばしの相対的長さを示す。
- ダッシュは、直前の語や発話が中断されていると見なせることを示す。
- . ピリオドは、直前部分が下降調の抑揚で発話されていることを示す。
- ? 疑問符は、直前部分が上昇調の抑揚で発話されていることを示す。
- ,
- コンマは、直前部分が継続を示す抑揚で発話されていることを示す。
- ↑ ↓ 上向きと下向きの矢印は、直後の部分で急激な抑揚の上昇や下降があることを示す。
- 文字 下線部分が強調されて発話されていることを示す。
- ° 文字° この記号で囲まれた部分が弱められて発話されていることを示す。
- hh 小文字のhは呼気音を示す。呼気音の相対的な長さはhの数で示す。この記号は「笑い」など異なるふるまいも示す。
- .hh ドットに先立たれた小文字のhは吸気音を示す。吸気音の相対的な長さはhの数で示す。この記号は「笑い」など異なるふるまいも示す。
- <文字> 不等号で囲まれた部分が、前後に比べてゆっくりと発話されていることを示す。
- >文字< 不等号で囲まれた部分が、前後に比べて速く発話されていることを示す。
- (文字) 聞き取りに確信が持てない部分は丸括弧で囲って示す。発話者についても同様。なお括弧の中に文字がない場合は、推測ができなかったことを示す。
- ((文字)) 参加者の視線や動作など、転記者による注釈・説明は、すべて二重丸括弧で囲って示す。
- [文字] 発話者が誰かの発話や思念を直接話法で引用していると見なせる部分。
- 7) タイムコードは会議の撮影開始からの経過時間。以下断片2、3も同様。なお撮影はケア会議の冒頭で参加者の了解を得た直後に開始している。
- 8) なお、断片1の提案はその後会議の中で以下のように展開していく。まず断片1の直後で高橋は父親の性格に配慮した支援の必要性というより大きな主張を行い、高専賃の提案それ自体はうやむやにされる。しかし断片1から、15分後（本稿で後に検討される断片2の直前で）、近松によって再度この高橋の提案への言及が行われる。その際近松は、父親が「家にこだわりを持っているか」と聞くことで、父が高橋の提案を棄却する可能性を尋ねる。これに対してこの提案が父に受け入れがたいことが、山田と茂太によって主張される。これに対して、近松、川上がチームとなるかたちで、実は高専賃への入居が、花子が65歳になることを待たずに、現時点でも制度的に可能であることが述べられるが、やはり山田と茂太によって、父の家へのこだわりの強さからそれは難しいことが述べられ、高専賃に移るという提案は棄却される。こうしたやりとりそれ自体がより詳細な分析に値すると考えられる。別稿を期したい。
- 9) 実際、遠距離介護者が参加するケア会議においては、頻繁に提案をめぐるやりとりが行われる。本稿が分析対象にしているケア会議の中でも、断片1を含めて、少なくとも10回の提案が確認された。その提案の概要は以下の通り。①花子の後見人として父親以外の親族を立てること、②父親・母親・

花子の3人で高齢者専用賃貸マンションに移ること、③父親と茂太とで、何かあったときにどうするかについて話し合うこと、④両親に花子の将来の施設入所について説明をすること、⑤ケアマネジャーを以前の担当者にすること、⑥茂太の同意で花子の施設入所申請を行うこと、⑦スーパーの配達サービスを利用すること、⑧スーパーまでの送迎サービスを利用すること、⑨ヘルパーにゴミ出しの介助を行ってもらうこと、⑩ゴミの戸別収集を利用すること。なお⑤のみ夏美からの提案で、その他は福祉の支援者からの提案である。

- 10) 断片2の中で言及される「トッテム」は両親の家から遠いスーパーであり、「ヤマシタ」は両親の家のそばにあるスーパーである。どちらも仮名。
- 11) Hayashiは、「報告に応じた質問の前置きとして『えっ』が用いられるとき、それは『理解の欠如に突然気づいた』という感覚を伝えるものであり、さらにそれは、連鎖的には置き換えられたり、分離したやり方で、続きの質問を開始するための手段として用いられる」(Hayashi 2009: 2125-6)と述べている。またShimotaniは、「『え』が前置きされた質問は、先行するターンと、後続するターンを結びつけ、現在の話題の連鎖を拡大／拡張するのに役立つ」と述べている (Shimotani 2007: 133)。
- 12) なお「買い物支援」という言葉が「宅配」に言い換えられたことに17行目で川上が強い同意を示していることは、川上にとって、その提案はより限定された種類の提案であったことを推察させる。このことは、断片3の直後で、川上により、スーパーまで送迎支援の提案が行われることとも関連があると思われる。
- 13) なおこうした山田の主張に対抗するように、断片3の直後の会話では、川上による送迎支援の提案に対して、夏美は父親を演じる形で、父親が提案を拒絶する態度を直接的に引用している。
- 14) 本稿執筆の過程で、会話分析研究会(申田秀也氏主催)でのデータセッション(2012年10月20日、2013年6月23日)の参加者の方々から多くの有益なアドバイスを頂いた。また、井口高志氏、出口泰靖氏、戸江哲理氏、早野薫氏、林誠氏、平本毅氏、松木洋人氏、および匿名の査読者からは様々な優れたコメントを頂戴した。そもそも取材・調査にご協力を下さった多くの方々が存在がなければ本稿を執筆することはできなかった。中でも、鳥根県A市の地域包括支援センターの方々には大きなご配慮を頂いた。それぞれの皆様に深く感謝したい。もちろん全ての誤りは筆者に帰す。なお本稿は、第23回日本家族社会学会大会(2013年9月7日、静岡大学)での報告原稿を大幅に加筆修正したものであり、平成24年度科学研究費研究活動スタート支援「遠距離介護の支援探求に関する社会学的考察」(課題番号: 23830057)、および平成25年度科学研究費若手研究(B)「遠距離介護の困難軽減のためのコミュニケーションに関する研究」(課題番号: 25870641)の成果の一部である。

文献

- American Association of Retired Persons, *Miles Away and Still Caring: A Guide for Long-distance Caregivers*. Washington, D.C., AARP, 1986.
- Collins, Glenn, "Long distance care of elderly relatives: A growing problem," *The New York Times* December 29: A1, C10, 1983.
- Finch, Janet and Jennifer Mason, *Negotiating Family Responsibilities*. London, Routledge, 1993.
- 藤崎宏子「老人扶養における家族、親族ネットワークと社会福祉サービスの機能分有一リトワク、サスマンの諸説を中心に」『人文学報』157、1982、57頁-82頁。
- 『高齢者・家族・社会的ネットワーク』1998、培風館。

- Gubrium, Jaber F., *The Mosaic of Care*. New York, Springer Publishing Co., 1990.
- Hayashi, Makoto, "Marking a 'noticing of departure' in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation," *Journal of Pragmatics*, 41: 2009, pp. 2100-2129.
- Hayashi, Makoto and Kaoru Hayano, "Proffering insertable elements: A study of other-initiated repair in Japanese," Makoto Hayashi, Geoffrey Raymond and Jack Sidnell (eds.), *Conversational Repair and Human Understanding*, Cambridge, Cambridge University Press, 2013, pp. 293-321.
- Home Care MEDICINE編集部「話題を追って [遠距離介護] (前編) 離れて暮らす親の在宅介護—遠距離でもできる介護を考える」『Home Care MEDICINE』3(9)、2002、47頁-51頁。
- 川島理恵「不妊治療方針に関する提案の構造」、西阪仰・高木智世・川島理恵(編)『女性医療の会話分析(テクノソサエティの現在3)』文化書房博文社、2008、157頁-176頁。
- 串田秀也『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社、2006。
- 松本一生・近森栄子・野川とも江・渡辺俊之「座談会—多様化する介護家族に何を提供できるか」『現代のエスプリ』437、2003、8頁-23頁。
- 森岡清美『現代家族変動論』ミネルヴァ書房、1993。
- 中川敦「実の娘による『遠距離介護』経験ときょうだい関係—なぜ男きょうだいを持つ娘が通うのか」『家族研究年報』31、2006、42頁-55頁。
- 「遠距離介護と同居問題—『なぜ?』はどのように語られるのか」三井さよ・鈴木智之(編)『ケアのリアリティ』法政大学出版局、2012、137頁-162頁。
- 岡村清子「老人と別居子との相互援助関係—都市部における実態」『社会老年学』19、1984、18頁-31頁。
- 太田差恵子『「遠距離介護」の上手なやり方』かんき出版、2000。
- Raymond, Geoffrey and John Heritage, "The epistemics of social relationships: owning grandchildren," *Language in Society*, 35(5): 2006, pp. 677-705.
- Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson, "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation," *Language*, 50: 1974, pp. 696-735.
- Schegloff, Emanuel A., "Description in the social science I: Talk-in-interaction," *IPrA Papers in Pragmatics*, 2(1): 1988, pp. 1-24.
- "Reflections on talk and social structure," Deirdre Boden and Don H. Zimmerman (eds.), *Talk and Social Structure*. Cambridge, Polity Press, 1991, pp. 44-70.
- "Confirming allusions: Toward an empirical account of action," *American Journal of Sociology*, 102(1): 1996, pp. 161-216.
- Shimotani, Maki "A claim-of-reanalysis token e?/e- within the sequence structure of other repair in Japanese conversation," *Japanese/Korean Linguistics*, 15: 2007, pp. 121-134.
- 田淵六郎「家族戦略と現代家族の変容」庄司興吉編『共生社会の文化戦略』梓出版社、1999、43頁-67頁。
- 田原裕子・荒井良雄「農山村地域における老親子関係と空間的距離」『老年社会科学』21(1)、1999、26頁-38頁。
- 戸江哲理「会話における親アイデンティティ—子どもについての知識をめぐる行為の連鎖」『社会学評論』62(4)、2012、536頁-553頁。

上野千鶴子『ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ』太田出版、2011。

山脇文子「姥捨山をつくるな—離れて暮らす親の老後」『AERA 臨時増刊 老人を棄てない—高齢化社会を生き抜く知恵』7(37)、1994、36頁-37頁。

横山博子・岡村清子・松田智子・安藤孝敏・古谷野亘「老親と別居子の関係—団地に居住する女性老人の場合」『老年社会科学』15(2)、1994、119頁-124頁。

湯沢雍彦「高年齢者と家族の社会的側面」地域社会研究所『高年齢を生きる2—高齢者と家族』国勢社、1972、21頁-48頁。

キーワード：遠距離介護 会話分析 提案 知識の上下関係

(NAKAGAWA Atsushi)

What Do Long-distance Caregivers Do?: Judgment of Propositions and the Epistemics of Long-distance Family Relationships

Atsushi Nakagawa

This study clarifies what long-distance caregivers do. To this end, I conducted a conversation analysis of video data of a care conference in which a long-distance caregiver participated. When a professional caregiver proposes a care plan to a long-distance caregiver, he/she substitutes technical terms with laymen terms for easy understanding, indicating his/her orientation that a long-distance caregiver is not a professional. However, if the caregiver laughs or averts his/her eyes during the discussion, it weakens the proposition. This means that a long-distance caregiver is important for judgment of a proposition. Occasionally, even if a long-distance caregiver and a professional caregiver judge the proposition and reach an agreement, as a basis for judgment, there is a conflict about which of them knows the family better.